

# 旧駅舎建築の世代継承に関する研究

## — 長期にわたる一時解体を経験した旧国立駅舎の保存活用を事例として —

1782022 五嶋 薫子

指導教員 大原一興教授 藤岡泰寛准教授

### 1. 研究の背景と目的

歴史的な駅舎建築は、日常的な利用の積み重ねやまちの玄関という存在から、地域の人々の愛着という無形の価値も有している。こうした駅舎建築の保存活用に際しては、駅としての日常利用の機会が変容することによる影響に留意する必要がある。

本研究では、市民の愛着が保存活用に結びついた事例の一つとして、東京都国立市の指定文化財である「旧国立駅舎」を取り上げる。同駅舎は14年間の一時解体を経て再築・保存されたものであり、これほど長く一時解体を経験した駅舎建築はほとんど例がない。そこで本研究では、時間経過がもたらす影響について調査し、世代継承の観点から無形の価値を含む旧駅舎建築の保存活用のあり方を考察することを目的とする。

### 2. 研究方法

①先行事例調査：参考資料やインターネットから、国内で文化財指定または登録されている旧駅舎建築の事例26件を収集し、時間軸と活用形態を整理した。

②-1旧国立駅舎基礎調査：旧国立駅舎のこれまでの経緯について、文献・ヒアリング調査を行った。

②-2旧国立駅舎認識調査：現役の駅舎時代を知る世代と知らない世代それぞれにヒアリング調査を行い、旧国立駅舎の認識や再築の受け止め方を比較した。

### 3. 文化財旧駅舎の分類

まず旧駅舎保存活用の実態を時間軸で整理するために、駅機能廃止から活用開始までの年数により26件の事例を分類した(図1)。半数は2年以内に活用されており、これらは駅機能廃止時点でその後の活用への動きがあったものであった。そうでないものは長期間未活用であり、二極化の傾向がみられた。次に活用形態について、駅機能廃止後の活用のされ方を、機能と主体によって再集計して図示した(図2)。全体としては地域連携により管理運営されているものが多いが、公開機能は所有者が主導するものに多くみられるなど、多様な活用形態があることが分かった。



図1. 時間軸の分類結果 図2. 活用形態の分類結果

### 4. 旧国立駅舎の事例から

#### 4.1. 国立市におけるこれまでの経緯

国立は、大正時代に箱根土地株式会社によって、郊外学園都市として開発された。計画当初から駅・駅前広場・駅からのびる大学通り・大学がまちの骨格として存在しており、駅は当初からまちと一体であったという特徴がある。旧駅舎は、外観や配置が景観に十分配慮して計画され、1926年に建設された。赤い三角屋根の特徴的な外観が市民に親しまれ、まちのシンボルとして定着していった。

#### 4.2. 旧国立駅舎の保存活用をめぐる経緯

JR中央線の高架化工事のため、1999年にJR東日本は旧駅舎解体を発表したが、保存を望む市民の声は大きく、行政も保存に向けて動き出した。長年の議論の末、旧駅舎を市の文化財に指定した上で一時解体し、工事完了後に再築するために部材を保管することとなった。旧国立駅舎は2006年10月に駅としての役目を終えて解体された後、14年を経て再築され2020年4月に新たに公共施設として開業した。時間軸でみると、長期間未活用であった事例の中でもその間解体されていたという点で特殊な事例である。

旧国立駅舎の再築後の活用方針は、市民や関係団体との意見交換も踏まえて「まちの魅力発信拠点」とされている。文化財として創建当時の姿で復原された旧駅舎の内部は、建物の歴史的価値や国立の都市計画を常設展で伝える展示室、地元のNPO法人が運営し観光案内や物産販売を行うまち案内所、特定の目的を持たず来た人が自由にくつろげる広間の3つの部屋で構成されている。広間や展示室の一部を使って国立の魅力を発信するさまざまなイベントも試みられている。活用形態でみると、多様な利用者が見込まれる機能を

持ち、運営側にも地域の団体や市民が関わっている。

### 4.3. 各世代の受け止め方

保存運動や地域活動に関わる人の中から現役の駅舎時代を知る世代7名（以下第一世代）と知らない世代4名（以下第二世代）を対象にヒアリング調査を行い、表1のように3つの項目に分けて比較した。対象者の属性と国立との関わり、時代背景を図3に示す。

駅舎の価値の認識 [1] についてみると、国立を象徴する存在であるという認識は世代を問わずあることが分かった。「駅舎の実物があってこそロゴや地図のマークなどの意味が通じる。(F氏)」という第一世代からの声や「解体されている間も旧駅舎をまちのアイコンとして積極的に押し出しているのは感じていた。(K氏)」という第二世代からの声も聞かれ、「国立のシンボル」として共通に捉えられていると考えられる。

次に時間経過 [2] についてみると、「旧駅舎がなくなってから、他のまちと差別化するための重要な存在だったと気づいた。(E氏)」という声が聞かれた一方で、「積極的に保存運動に参加していたが、いざなくなると旧駅舎のない景色に見慣れてしまった。(G氏)」という声も聞かれ、第一世代の中でも解体後の受け止め方はさまざまであったことが分かった。

今後の期待・願望 [3] についてみると、「駅舎から国立のまちを見て、たくさんある国立の魅力を知ってほしい。(B氏)」というまちの玄関口となることへの期待をはじめ、両世代から多様な意見が聞かれた。

ヒアリング全体を通して、第一世代からは旧駅舎に対する強い愛着が窺えた。これは駅として実際に使っていた経験に加え、保存運動や解体再築を経て、その思いはさらに強くなっていったためと考えられる。しかし第二世代は、「一度なくなったものが実際に形として残ったことに単純に驚く。(J氏)」という声もあったように、駅舎再築を第一世代よりもより客体化して捉えている様子が窺えた。

### 5. 世代継承に向けた考察

駅という機能が失われても、旧駅舎が世代を超えて自分たちのまちのものとして親しみを持たれるためには、使われ方が変わっても何らかの形で直接旧駅舎と関わるのが重要であると考えられる。この点で、旧国立駅舎は多様な使われ方が想定されている状況は期待が持てるが、活用までに長期にわたる時間経過を要

したことを考慮すると、より日常的な結びつきをつくり出す工夫も必要となろう。例えば、地域の学校と連携して歴史を学ぶ生きた教材として活用するなどの工夫も考えられる。

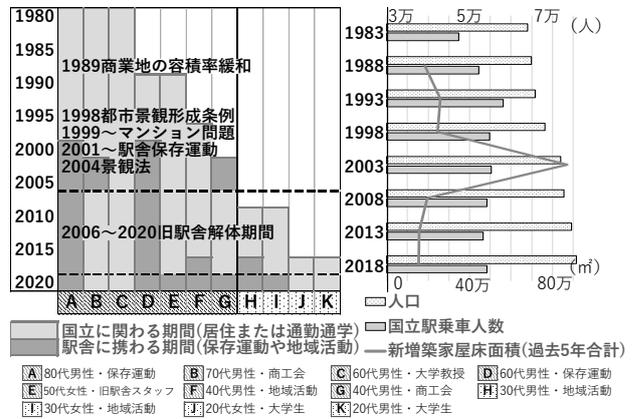


図3. ヒアリング対象者の属性と時代背景

表1. ヒアリング結果

	第一世代	第二世代
[1] 駅舎の価値の認識	<ul style="list-style-type: none"> <li>象徴性=国立を表すもの(BDEF)</li> <li>歴史性=まちの歴史を伝えるもの(BD)</li> <li>景観・場所性=そこにあることが重要(ABDFG)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>象徴性=国立を表すもの(HIJK)</li> <li>歴史性=まちの歴史を伝えるもの(H)</li> <li>話題性=注目を集めるもの(HI)</li> <li>機能性=駅に代わる新たな機能の良さ(J)</li> </ul>
[2] 再築までの経緯や時間経過	<ul style="list-style-type: none"> <li>なくなってから価値を認識した(E)</li> <li>駅舎がない景色に慣れていた(BG)</li> <li>復元されたからよかった(ABDEG)</li> <li>世代間のギャップを感じる(DGF)</li> <li>経緯の記録が蓄積されなかった(D)</li> <li>安全性が確保された(B)</li> <li>文化財としての新たな可能性(D)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>エネルギーが感じられる(I)</li> <li>学生の中にはなぜ再築されたのだろうかと疑問に感じている人も多い(JK)</li> <li>保存運動がコミュニティ発達のきっかけとなつたのではない(I)</li> <li>国立に来た当初から駅舎があったらもっと身近に感じられた(K)</li> </ul>
[3] 今後の駅舎への期待・願望	<ul style="list-style-type: none"> <li>まちの起点、玄関であってほしい(BC)</li> <li>駅舎の価値を知ってほしい(BD)</li> <li>使われ続けてほしい(D)</li> <li>JRと協力できたらいいのでは(D)</li> <li>若い世代にも自分のまちのものとして活用を考えてほしい(D)</li> <li>経緯が記録として蓄積されてほしい(D)</li> <li>円形公園まで一体として使う可能性(D)</li> <li>地域のひと何か共有できるような企画をしたい(G)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まちを回遊するきっかけとなってほしい(H)</li> <li>駅舎の価値を広めたい(HK)</li> <li>自分のまちのものとして認識されるには使われることが大切だと思う(H)</li> <li>運営の担い手の発信力に期待したい(H)</li> <li>多くの人の意識の中にあるような存在になってほしい(H)</li> <li>幅広い層に情報を届けたい(IJ)</li> <li>人それぞれの国立との関係性を考え活用を生かすべき(JK)</li> </ul>

[謝辞] 本研究にあたり、調査にご協力いただきました国立市国立駅周辺整備課の方々、旧国立駅舎運営関係者の方々、駅舎保存団体の方々、商工会の方々、一橋大学の方々に深くお礼申し上げます。

### 参考文献

- 小谷暢宏「旧駅舎建築の保存・活用に関する研究—国立駅を事例として—」(2006年度 横浜国立大学 卒業論文)
- 大内田史郎「鉄道駅としての役割を終えた旧駅舎の保存・活用について—全国の登録有形文化財駅舎に関する研究(その2)—」(日本建築学会計画系論文集 第85巻 第771号 p.1141-1148 2020年)
- 国立市「国立駅周辺プラン報告書」(2000年)
- 国立市「旧国立駅舎活用方針報告書」(2017年)

### 注

<sup>1)</sup>活用形態の分類方法

機能による分類

- 【交流機能】カフェやイベント施設など、交流の拠点となり地域の人の利用が見込まれるような機能を持つもの。
- 【発信機能】観光案内所や鉄道公園など、地域外からも積極的に人を呼び込むような外に向けた発信機能を持つもの。
- 【複合的機能】交流機能と発信機能を併せ持ち、より多様な利用者が見込まれるもの。
- 【公開機能】駅舎自体を資料として、関連資料とともに公開するにとどまるもの。積極的な活用とは言えない。

主体による分類

- 【地域連携型】市民有志の団体や地元の観光協会が管理運営に携わり地域と連携して管理運営されているもの。
- 【所有者主導型】駅舎を所有する行政や民間会社が管理運営を行うもの。

<sup>ii)</sup>コロナ禍により現在は展示イベントが中心である。